

上記のような方針によつてすすめられているので、併せて大方のご批判を得たいと思います。(企画課)

汚水被害でサケは 全滅の危機

水質汚濁防止法案が制定されて満1年を迎えようとしているが、依然として北海道のサケが汚水被害で破滅の危機にさらされているが、汚水被害防除の必要性を全国的な世論に湧かせたいものである。以下はこれについて北海水産新聞の掲げた社説。

全道各地の河川は、工場の廃液やら都市の廃水、あるいは農業などに刻々と汚染されているが、強力な防除対策はないにひとしく、河川および河口周辺海域の水産資源は、いまや破滅の危機にさらされている。

一例を網走管内の常呂川について見よう。

常呂川には北見市農協の合理化澱粉工場、北見パルプ工業KK工場および日本甜菜糖KK北見工場の廃液が流され、さらに北見市の都市廃水も流入しているため、河水の汚染が甚だしく、溯上する秋サケやら河口周辺海域のホタテ貝などには、すでに恐るべき影響が現われており資源の将来が憂慮されている。

このうち北見パルプ工業KKの工場だけは、廃液処理と真剣にとり組んでおり秋サケが溯上する時期には生産制限さえも行なつて廃液の量を減らすなど、きわめて良心的に操業しているので、その被害もかなり緩和されているが、甜菜糖と澱粉工場についてはほとんど野放しの状態である。

従つて河川はビート屑や澱粉廃液から出来るノロ(水生菌によつて生長した湯

垢状のもの)でドス黒く染つており、孵化場のサケ捕獲場でおろす曳網などは、わずか三十分で網目が詰まり、布状になつて押し流されてしまうという。正に言語を絶した惨状を呈している。

こんな汚れ切つた河をサケが嫌うだろうことは当然で、地元漁業者の観察によつても、サケの溯上、産卵の生態にハッキリと現われている。

大体秋サケは、時化のときほど河に溯つてくるというのが常識だが、近頃は時化がおさまつてややしばらくしてから溯つてくる。

これは察するところ、河口に沈澱した汚物が時化で掻き回されて河水が濁り、そのためサケは河に入らず、時化あとの汚物の沈澱を待つて溯つてくるものらしい。

また、腹に触れると卵が落ちそうな産卵寸前のサケが、河口近くの網に多くかかるようになってきているが、これは今まで見られなかつた現象であり、河の汚染のため溯れず河口で洄遊しているうちに網に入つたものだと見られる。

昔は大量にとれたホタテ貝も、近年は河口周辺では全くとれなくなつている。

またサロマ湖に注ぐライトコロ川の上流にも澱粉工場があるが、河口の養殖カキが小さく萎縮して成長が止まつてしまつたため、この冬は予定した収獲が出来ないで来年まで持越すことになつた。

このように汚水被害は幅広くしかも深刻な実害を沿岸の魚族に与えており、沿岸漁民の生存権をひしひしと脅やかしている。

道水試網走支場の水質調査は、現地漁業者の心配を科学的に裏づけている。

常呂川、斜里川、ヤンベツ川などのサケの溯上期における水質の状態をみると過マンガン酸カリの消費量はゼロに近

い。
すなわちほとんど酸素を含まず、正に「死河」の状態だというのである。

ところでこれらの汚水被害の対策はどうだろう。

同支場が行なっている調査は、正規の職務外の仕事として地元負担金に頼って細々で行なっている程度であり、この仕事のための国や道の予算は全然組まれていない。

また調査の内容も、河川の汚濁度だけに止まつており、これが生物におよぼす影響やら河口海域の被害状況については全くノータッチという状態である。

道水試本場でも、この問題にはわずか十万円あまりしか予算を与えられておらず、毒性のはげしい農薬の影響などについても、全く手を染めていない。

道庁でも、総合開発企画本部が窓口となり、水産増殖係が対策に当つてはいるが、やはり十万円程の予算でほそぼそと仕事をしているに過ぎない。

昨年12月、水質汚濁防止法が成立したとはいうものの、全然決め手のない生ぬるい法律であり、汚水被害の脅威はサツパリ減つていない。

大体、水産業界はおとなし過ぎる。

業界は尻に火のついた重大問題に直面して、今こそ起ち上るべきだ。

まず道水産会あたりがまとめ役になり最大の被害地区、北見沿岸の単協代表やら道議などが推進力となり、学識経験者を交えた対策審議会をつくるべきだ。そして常例会議を開いて対策の進め方や予算獲得の方法などについて検討を重ね世論喚起の原動力となるのがよいだろう。

なおこの河川サケ、マス問題は、北洋サケ、マス資源の維持増殖とも大いに関連があるので北洋関係者の関心をも喚起する必要があり、撓まず力強い運動を展開して、汚水被害防止の必要性を強力に訴え、全国の世論を湧き上らせるまでに持つてゆくことが望ましい。

—短 信—

西別川のカワマス

蒲原 八郎

小生が虹別支場（当時）に在勤したのは昭和9年4月から昭和12年10月まで赴任当時西別川にはカワマスはいないようでした。しじゅう釣をしておりましたので、そのように思います。丁度同じ時期に同支場に在勤した前川兼佑氏（旧姓三浦、現山口県内海水産試験場長）とニジマスの飼育を受持つておりましたが、その当時（恐らく昭10～11年）事務室前の養魚池（中央のもの）でカワマスを飼つた記憶があります。種卵の入手先は残念ながら記録の持合せもないし、記憶もありません。

現在西別川にカワマスが棲息しているとすれば、恐らくこれが祖先であろうと思います。当時虹別に勤務していた人々には幸内氏、洞爺湖の大友氏、大久保司氏などがおられました。

編者は本誌76号の編集後記に虹別のカワマスはどこから来たものであろうか、と書いた。これについて稚内の北水研支所にいられる蒲原八郎氏から大要上掲のようなお手紙をいただいた次第。（秋）